

植 調 剤 随 想

3月末から4月半ばにかけ、所用でヨーロッパからアメリカを廻る機会を得た。一夜明けて見るアラスカの山野は、まだ深い雪に閉ざされていた。つれづれなるままに、果てしなく続くこの原野が、将来人口爆発からの必要に迫られて、開墾・耕作となった場合、最も役に立つものは何であろうか、など思いを廻らせてみた。短い春、夏を経て短い秋に終る間で、経済的な収穫をあげるためには、それなりの適応品種の開発も必要であろうが、魔法の薬のようにそれをかけたら、日ならずして成長し、短い生育期間、乏しい日照など物ともせず、立派な収穫をあげられる。そんな薬に恵まれたら、さぞかし幸いであろう。生物工学の諸研究が漸くその緒につかんとする今日、日植調加盟の各社の中から、そんな薬を発明する人は出てこぬものか、などと他愛もないことを考えながら、機中の人、白皚々のマッキンレー山の横を通過したのであった。その後、欧米数社の研究施設を見学する間、見聞したものは、除草剤研究の花盛りで、本格的な植調剤の研究にはお目にかかれなかった。僅かに某社で、麦の品種改良を手取り早くやるために、気にくわぬオス麦の種を断種する薬に出くわした。短駆肥満の雄である私にとって、このような改良法は、身につまされていささか気になるところであったが、往路アラスカの上空で随想した寒冷地での短期栽培型品種の発明には、こんな手荒な方法も役に立つのだろうか。帰途カナダからアラスカの上空を横切ったが、4月半ばというのに大自然はピクともせず、深い雪の中に閉ざされていた。

〔財団法人 日本植物調節剤研究協会理事 三井東圧化学株式会社精密化学品本部長 鈴木昭夫〕

目 次 (第16巻第2号)

世界の畑作雑草と除草体系

(4) 雑草防除研究の現状と動向……………2

＜宇都宮大学 竹松哲夫・竹内安智＞

- I. 先進国における最近10年間の
雑草防除および除草剤研究……………4
- II. 耕作法の変化と雑草防除……………14
- III. 雑草防除の将来に向けての研究……………16

昭和56年度畑作マルチ資材試験成績

概要……………22

＜東北農業試験場 奈良正雄＞

1. 光崩壊性マルチフィルムの適用性……………23
2. 寒冷地におけるマルチ栽培の安定化に関する試験……………24

昭和56年度リンゴ用除草剤・生育調

節剤試験成績概要……………29

＜財団法人 日本植物調節剤研究協会＞

昭和56年度落葉果樹関係除草剤・生

育調節剤試験成績概要……………36

＜財団法人 日本植物調節剤研究協会＞

外国文献抄録

「除草剤に関する溶解、土壤吸着、
生物濃縮などの相互の関係」……………46

昭和56年度常緑果樹関係除草剤・生育調節剤試験成績概要については、頁数の関係上次号に掲載いたしますのでご了承下さい。